

経済学史学会第72回全国大会(2008年5月24・25日於愛媛大学)
カール・ポランニーにおける「経済と社会」 『人間の経済』の主題と方法

若森みどり(首都大学東京社会科学部)

(1) 究明課題: 『大転換』とは異なる第2次世界大戦後のポランニーの新しい問題設定や主題が何であったのか? 報告では、『大転換』初版[1944]執筆後、1964年に亡くなるまでの晩年のポランニーの社会経済思想に照明を当てる。カンジャーニやモクラン等による最近の経済学史的なポランニー研究(Cangiani[2006][2007], Maucourant[2005])の成果を踏まえて、コロンビア大学時代の最も代表的な論文集『初期帝国における交易と市場』[1957]および『大転換』後の単著として刊行されることになっていた遺稿集『人間の経済』[1977]についての経済思想史的な解釈の可能性 ポランニーにおける「経済と社会」の主題形成を提起する。

『人間の経済』の章別構成

カール・ポランニー その生涯に関するノート (イローナ・ドゥチンスカ)

編者はしがき、編者序文(ピアソン)

著者はしがき、著者序文

第1部 社会における経済の位置

A. 概念および理論 第1~3章

20世紀の経済主義的誤謬、経済的の2つの用法、統合の諸形態と構造の概念

B. 制度 第4~7章 原始社会およびアルカイック社会における経済行為

第2部 市場経済の三要素 交易・貨幣・市場

序論、第8~第10章 交易・貨幣・市場の市場的観点と非市場的観点

第3部 古代ギリシアにおける交易・市場・貨幣

序論、第11~17章 古典古代ギリシアの経済生活、民主制ポリスと穀物市場

ポランニーが遺した著者序文によれば、『人間の経済』の執筆は『大転換』後の思考展開の総決算とでもいえるべき単著として描かれるべきものだった。しかし、1957年に病に倒れたポランニーには、『人間の経済』を完成させる時間が残されていなかった。ポランニーの死後、『人間の経済』の膨大な草稿の束のなかに、1957年所収論文や「メンガーにおける経済的の二つの意味」などのすでに仕上げた論文からの様々な引用のメモ書きや断片のほか、まったく新しい構想(著者はしがき、著者序文)とまとまった論稿の束(とりわけ、古典期アテネの経済についての論稿)が見つかった。コロンビア大学での同僚であったピアソンは、ポランニー自身の手によってほぼ完成された状態で見つかったはしがきや序文および論文の章(第1部第1章、第4章、第3部第11~15章)、断片そのものである第7章、そして引用のメモ書きや断片をピアソンが継ぎ接ぎして完成させた章(とりわけ、第1部第2~3章、第2部第8~10章、第3部第16~17章)からなる書物として『人間の経済』を編集し、公刊した。

報告の意図 = 遺稿『人間の経済』[1977]の主題と方法の意味を明らかにすること。そのことによって『大転換』後にポランニーの検討した課題を理解すること

(2) ウェーバー的問題圏をめぐる対抗軸とポランニーの参加

知的背景と関連年表(大会当日に参考文献とともに別紙配布)

戦間期に始まり第2次世界大戦後アングロ・サクソンにおいて本格化した経済学の領域と方法をめぐるロビンスの影響とそれへの対抗において、ウェーバーの受容の仕方がひとつの争点(ロビンス、パーソンズ、ポランニー)。「経済人類学」として分類されてきた『大転換』後のポランニーの仕事は、この対抗軸へ絡み、ウェーバーの継承をめぐる論争への参加としてより広い知的文脈に位置づけられる。「社会における経済の位置とその変化」というポランニーの制

度主義的アプローチは、ロビンズが削ぎ落としたウェーバー的な問題圏（経済行為の2つの意味、市場経済と非市場経済の類型化など）を再設定。

（3）ポランニー研究における『大転換』後のポランニー像

- a. 市場経済を時間的・空間的に相対化する道具箱を開拓する経済人類学者、古代経済史家
- b. 近代文明批判家としてのポランニー像（Rotstein[1991][1994]、佐藤[2006]）
- c. 实在経済学の経済思想史家としてのポランニー像（玉野井、Cangiani[2006][2007]）

Cangiani[2006]は、『大転換』後のポランニーの研究を経済思想史の文脈 第1次世界大戦に始まり、第2次世界大戦以降本格化した経済学の方法をめぐる純粋経済学と制度主義・歴史主義的経済学(史)の対抗 のなかに位置づける。

Cangiani [2007] ポランニーの経済・非経済的動機概念+「埋め込みからの離床」(dis-embedded)概念=ウェーバーの「経済と社会」の概念。ポランニーの制度主義的方法は非市場経済のみならず稀少性の原理を経済過程として制度化している市場経済分析にも該当する。それはウェーバー的な問題「資本主義の実質的非合理性」の問題に基礎づけられる。ポランニー・ウェーバー関係については、Humphreys[1969]において言及されていた¹。

R.Swedberg[1998] *Max Weber and the Idea of Economic Sociology* 経済社会学の観点からポランニーとウェーバーの接点に言及。Swedbergによれば1947年にポランニーはウェーバーの遺稿『経済と社会』に基づいて講義ノートを準備していた。

従来のポランニー研究において、Cangiani[2007]を除いて、ポランニーの实在経済学の「道具箱」そのものの発想、ルーツは問われてこなかった。自らが参考に行っている文献や方法を明示しないポランニーの「癖」も結果してポランニーの諸論考におけるウェーバーの影響やウェーバーが設定したより広い知的な文脈の位置づけの重要性はほとんど見落とされてきた。

（4）ポランニーにおける「経済と社会」の展開（計3期=第1期1920年代、第2期『大転換』、第3期『大転換』後の制度主義的アプローチ）

（第1期）機能する社会主義経済の理論的基礎付け(1920年代)

ウェーバーの著作の最初の引用 「機能的社会理論と社会主義の計算問題」(ミーゼスとヴァイルへの批判的返答1924年)

社会主義経済における計算問題をめぐって3つのグループに分類

第1のグループ 市場経済理論の代表者 ミーゼス

第2のグループ 「市場のない経済」理論の代表者 ノイラート

と = 「市場経済と市場のない経済との理論的対立」の次元に留まっている。

第3のグループ 積極的な社会主義理論の代表者 ハイマン、G.D.H.コール

市場原理と計画原理を相互に利用しながら（必要充足についての）公正さと（生

¹ 「ポランニーの理論の核心には次の点が含まれていた。現代の経済理論は未開諸社会に適用できない。そして『経済』には2つの意味、形式のおよび実在的な意味がある。現代の市場経済においてのみ両者の意味が区別されないので、経済諸システムの比較研究は『経済』の形式的ではなく実在的な意味から始めなければならない。ポランニーによれば、実在的な意味で経済とは『継続的に物質的な欲求充足を提供するような人間と人間の環境との相互関係な制度化された過程である』。・・・経済の形式的意味とは『代替的な諸目的に対する稀少な資源の配分』である。ポランニーの区別は、マックス・ウェーバーの『経済行為』と『合理的な経済行為』の区別、そしてウェーバーの実質的および形式的合理性の区別にきわめて近いものである」（Humphreys[1969]p.196）

産の) 技術的効率性を共に引き出す経済社会の枠組みを考察する理論
原注でポランニーはウェーバーの理論を第3のグループの理論的基礎付けに利用している。「・・・われわれは『完全な共同経済』(ハイマン)を、マックス・ウェーバー的な意味、つまり規定されたある秩序によって系統的に方向づけられている必要充足(ハイマン)としてではなく、機能主義的な意味、つまり機能的な自立組織間の自由な相互作用として利用したい、と考えている・・・」(邦訳 157頁)

(第2期)『大転換』: 19世紀市場経済の制度形成と崩壊(1944年)

・『大転換』第4章「社会と経済システム」

「現代の経済史家にとって、原始経済を文明社会の動機や機構の問題には無関係だとして無視することに異議を申し立てた最初の人、マックス・ウェーバーである。・・・最近の歴史学および人類学的研究におけるきわだった発見によると、人間の経済は一般に人間の社会的諸関係のなかに埋め込まれている。人間は物的財貨を所有するという個人的利益を守るために行うのではない。人間は自らの社会的地位、社会的権利、社会的資産を守るために行う。人間はこうした目的に役立つ限りでのみ物的財貨に価値を認める。生産過程も分配過程も財貨の所有と結びついた特殊な経済利害とつながりを持たない。・・・狩猟・漁猟共同体から巨大な専制社会に至るまで、その社会的利害は大きく異なっているであろうが、いずれの場合にも経済システムは非経済的諸動機に基づいて動かされている」(G.T.pp.45-46/60-61頁)

・ポランニーは、ウェーバーの『一般社会経済史』を市場経済とは異なる経済制度のパターンを類型化する際の仮説の典拠としている(『大転換』第5章「市場パターンの進化」への文献ノートへの文献ノート抜粋、訳 373-380頁)

「商業は、初めは種族的諸集団間の取引である。それは、同じ部族ないし同じ共同体の成員間には生じず、最も古い社会的共同体にとっては外的な事象であり、ただし他部族に対してのみ向けられている」(ウェーバーの『一般社会経済史』英訳 p.195)

「交換の一般的媒介手段としての機能は対外貿易から生じた」(ウェーバー前掲書 p.238)

『大転換』では原始経済と市場経済の2分法 Polanyi[1957][1977]では原始、古代、近・現代3分法になる。近・現代の市場編成とは異なるシステムによって複雑な社会の諸経済を処理している古代=「アルカイック」概念が登場。

二重運動を軸に市場経済の形成と崩壊の制度転換の歴史を描く『大転換』の理論的基礎付けとなっているのはウェーバーではなく、一方では論敵としてのダイシー、スペンサー、ミーズ、他方ではトーニーやコール、オーウェンであった。

(第3期)『大転換』後: 社会における経済の位置とその変化 = ポランニーの制度主義的方法
コロンビア大学時代の出発点となった一般経済史講義ノート(1947年; 邦訳『人間の経済』補論に所収)

【一般経済史における問題提起】

「経済的」の2つの意味: 1) 物質的な欲求・充足を用意し提供すること、2) 形式的意味

「社会における経済システムの位置に関する問題は、いくつかの重要な問いを含んでいる。たとえば経済的諸制度の独立性あるいは埋め込みの度合い、個々人がそれらの諸制度の運営に参加する現実の心理的動機、あるいは経済的諸制度の進化に関するありうるべき発展法則という問題である。これらの重要な論点は、『経済的』という言葉が単に『欲求・充足の物質的な手段の提供に関連するもの』を意味すると見做されないならば、予断に陥る危険がある」(邦訳 531頁)

【一般経済史の方法的基盤】

ポランニーは、モンテスキューから始まりマックス・ウェーバーを終着点とする経済社会思想家をとりあげ、彼らの特徴を「経済主義的アプローチ」(＝社会における別個で異なる領域としての経済システムに集中するより狭い見解)と「社会的アプローチ」(＝全体としての社会に関心を持つ広い見解)の軸で分類。ポランニーによれば、「経済的」な意味は、社会的アプローチにおいては「物質的財の提供」、経済的アプローチにおいては「利益の追求ないしビジネスライクな態度」として定義されてきた。

- 1) 最初の社会的アプローチ(社会科学における制度学派の先駆者モンテスキュー[1748]、ケネー[1758]、スミス[1776])
「現代的に言えば、モンテスキューのテーゼは、社会の諸制度は所与の環境のもとでのその社会のニーズを反映する、というものであった」(邦訳 535 頁)
- 2) 最初の経済主義的アプローチ(タウンゼンド[1786]、マルサス[1798]、リカード[1817])
「・・・もし救貧法のような『干渉』がなければ食糧供給と人口の間に自然の均衡が成り立つと主張した。・・・社会における経済システムの位置は、社会や政府の力によってではなく、自然自身の力によって確定された」(邦訳 543-544 頁)
- 3) 社会的アプローチへの回帰(ケアリー[1837]、リスト[1841]、マルクス[1859])
「マルクスの議論は人類学的、制度的、そして歴史的であった。その議論は全体としての社会という観点に集中した。・・・しかし同時にマルクスは意図せずして経済主義的立場を強化した」(邦訳 548 頁)
- 4) 経済主義的アプローチへの回帰(メンガー[1871])
「メンガーは物質的な欲望・充足に関する事柄と、稀少手段の配分に関する事柄とを慎重に区別した最初の経済学者である。新古典派経済学は選択の理論すなわち『形式的経済学』を物質的財の配分と関係付けることによって、経済理論の領域を定義した」(549 頁)
- 5) 3) と 4) の総合(ウェーバー[1905])
「世紀の変わり目ごろ、マックス・ウェーバーは・・・経済学固有の合理主義的な面を強調しながらではあるが、社会的アプローチに回帰した。・・・ウェーバーは『経済的』という言葉の定義に当たって、意識的に実在の意味と形式的意味の両者を含ませた。ウェーバーは『経済的』という言葉は物質的な欲求・充足の手段の提供を意味すると主張した。しかし彼はまた、本質的に『経済的な』行為は『純粹合理性』(目的合理性)を持っているとも主張した。この両義性のために、ウェーバーの用語は資本主義的経済の研究にとって非常に有用な道具となった。・・・合理性の基準として仮定されているのは処分する稀少手段の諸用途間の間での1つの選択を行う人間である。・・・ウェーバーは『経済的』という言葉の実質の意味に賛意を示す立場を確定しなかったために、一般経済史の諸問題を明晰にしようとする彼の試みが害われたのであった」(邦訳 550-555 頁)

『初期帝国の交易と市場』(1957年)のプロジェクト＝「社会における経済の位置」

『初期帝国における交易と市場』のタイトルは非市場社会の経済制度研究(経済人類学)に焦点がおかれているように見える(Maucourant[2005])。しかしそれは一部であって、ポランニーが寄稿した「制度化された過程としての経済」およびパーソンズの『経済と社会』を取り上げているホプキンスとピアソンの論文がこの本の主題「社会における経済の位置」の方法と概念を示す中心的な位置にある。ポランニーの諸論文は、ウェーバーの『経済と社会』における制度主義的概念、トゥルンヴァルトやマリノフスキーの人類学的研究、アリストテレスの経済観、『経済学原理』の改訂執筆を試みた晩年のメンガーから、第1次世界大戦後の制度変化を捉

える新しい枠組みのアイデアとなる諸要素を吸収した過程の成果を示している。「制度化された過程としての経済」は、ポランニーが社会科学における「経済的という用語の2つの区別」の重要性 メンガー、ウェーバー、パーソンズの経済行為の定義に絡む重要な問題 であると明言し、経済を制度化され過程として実体的に定義した最初の論文である。『人間の経済』第2部の制度的諸概念（経済の統合の諸形態＝互酬性・再分配・交換、交易・貨幣・市場の市場経済学的定義と非市場経済学的定義）は、この論文ですでに提示されていた。この際、ポランニーはウェーバーの制度主義的概念（会計・価格・貨幣・市場の制度史）を展開する意義に触れている。「アリストテレスによる経済の発見」の論文では、アリストテレスがポリスの目的によって経済が制度化される方法を主張し、稀少性の概念による経済の制度化を拒絶したことについて言及している。

『人間の経済』（1977年）

第1部 経済主義的誤謬 経済中心な制度化と思考から自由にならなければ新しい社会への転換は困難である、という認識。ロビンズに象徴されるように経済学の専門化・科学化の進展のなかで、そのような経済学の提供する稀少性の概念に基づいた経済合理的な行為が経済の定義の核心として社会科学一般に広がりつつあった。ポランニーは、「経済唯一主義」 経済中心に再編され、制度化される社会概念（政治学の貶めを含む） 市場を中心に書きかえられる歴史叙述（市場進化論、合理化論）、経済中心に定義される社会規範（自由＝経済的自由）が第2次世界大戦後のアングロ・サクソンの「時代の精神」になっている、と危機感を募らせた。

第2部 「制度化された過程としての経済」論文

第3部 古典古代ギリシアにおける経済生活、アテネの民主制と地域市場、穀物の管理交易
「ポリスを理解するとは、そこで市場が占める位置を理解することにほかならない」（『人間の経済』293頁）

ウェーバーのオイコスを2つに区別して展開。

寡政的オイコス＝富者の大家政（奴隷のみでなく貧しい市民を囲っての再分配）

民主主義的ポリス共同体（市民の政治参加を可能にする基礎的物資の供給をするための制度化、その一環としての市場の利用）

この2つのオイコスには相異なる経済の制度化の論理がみられる、という趣旨。ポランニーによれば、古代ギリシアにおいては民主主義という倫理的価値（実質合理性）を実現可能にするような方法で経済の諸制度（市場や交易や貨幣＝形式的合理性）が制度化されていた。市場的要素と計画的要素の統合・総合のパターンという観点からポランニーは、制度化の方法、経済を社会に埋め込む方法を示した。

ポランニーは、ウェーバーの経済行為の2つの区別を『大転換』後の出発点として、ウェーバーの工具箱を市場経済の転換のための工具箱にするための知的な格闘を開始した。ポランニーから見ると、ウェーバーは多様な経済制度の可能性を提示していたにもかかわらず、形式合理性の議論や狭義のオイコス論、形式的合理性と実質的合理性の二分、社会主義批判など市場志向の制約から自由ではなかった。ウェーバーは市場的原理と計画的原理を分類するに留まった。さらに前者を形式的合理性（計算可能性）後者を実質的合理性（倫理的価値）に関連させて、両者の根源的な矛盾を示唆するにとどめるなど（『経済行為の社会学的基礎範疇』）経済と政治の分離、経済と倫理の分離を後押しする思考を遺した。その結果、社会における経済の位置を転換する人間の諸能力（制度的調整の自由）のための制度主義的基盤を十分に伝えることができなかった。

1963年のブダペスト講演

「もしも歴史の過程で経済が全社会のなかで位置を転換するのだとしたら・・・それはどこからどこへ、その位置を変化させることであろうか。・・・たとえば今日の社会主義はまさに、市場経済と非市場経済の境界線がぶつかり合うような領域に関して経験を深め、視野を広げることを要求されている。いまや資本主義は、計画化の要素を強引に市場経済を超える領域へと導入しようとしている。・・・低開発の世界は新興諸国におけると同様、市場的要素と非市場的要素とが互いに競い合っている。社会主義は、現代的な社会学を包摂している経済史がきわめて開かれた精神を持っていることに全面的な注意を払うべきである（前掲書、32-33頁）。

（まとめ）『大転換』後のポランニーは、市場経済の思考習慣と決別した、全体的な人間の経済と社会の見方 ポランニーの社会哲学 を回復しないかぎり、市場社会からの「転換」の実現が困難である、と明言した。その際ポランニーは、市場経済の遺産である経済決定主義と市場志向の影響から逃れるために、ウェーバーから出発した。したがって、『大転換』後の「社会における経済の位置とその変化」という制度主義的方法、実在的経済学の道具箱の思想的ルーツはウェーバーの『経済と社会』の問題圏に基礎づけられる。当時の知的文脈にコミットした「社会における経済の位置」というポランニーの制度主義的アプローチは、ロビンズが削ぎ落としたウェーバー的な問題圏（2つの経済行為の意味、2つの稀少性の意味、形式的合理性と実質的合理性の緊張関係、市場経済と非市場経済の類型化）を再設定したものである。

ただし報告では、ポランニーにおけるウェーバーの「経済と社会」という問題圏は3つの時期に区別されるものとして把握した。ポランニーの第1期からの関心は、市場原理と計画原理の相互補完関係を論じる枠組みを考察することであった。ポランニーは1924年の時点で、ウェーバーの遺稿『経済と社会』（*Grundriss der Sozialökonomik*, .Abt）を参照し、自らの社会主義経済理論の基礎付けに利用している。この第一期の活動の舞台が中欧であったのに対し、第2期と第3期は、アングロ・サクソン。アングロ・サクソンの知的文脈にコミットすることによって、そこにおけるウェーバーの著作やメンガーの経済理論の受容の仕方、とりわけ経済学の専門化・科学化の問題 それが人間の制度構築の能力に与える悪影響 について関心を持つに至る。

以上、「社会に埋め込まれた経済」「社会に埋め込まれた経済の位置のシフト」というキーワードがポランニーにとって前市場経済のみを対象としたものではなく、第1次世界大戦後の市場社会崩壊後における制度変化の意味を問い、そこにおける市場的要素と計画的要素との創造的調整の可能性を切り開くための新しい思考の枠組みであった、という点を明らかにした。ポランニーの認識によれば、第1次世界大戦以降の制度変化においてたしかに市場経済はピークではなくなったにもかかわらず、市場経済の負の遺産である思考習慣が支配的であって、そこから抜け出すことが困難な状態にある。それらと闘う方法を見つけることが遺稿『人間の経済』の主題を形成した。いわば、「社会における経済の位置とその変化」という主題と方法は、ウェーバーとパーソンズの『経済と社会』を意識した第一次大戦後の文脈におけるポランニーの新たなビジョンであり、研究アジェンダだった²。

² この意味において、『大転換』後のポランニー像についての玉野井の解釈（市場経済の特異性と非市場経済との対照；『経済の文明史』編訳に寄せた「解題」1975）も佐藤の解釈（社会主義の挫折から過去のユートピア的追求へ；『ポランニーの社会哲学』2006）も、共に晩年のポランニーの社会経済思想における「社会に埋め込まれた経済」という問題設定の主題的重要性を捉えていないように思われる。